

## 質問 1

耐震補強と全面リニューアルを施した現在の再建天守は、向こう15年から20年はもつと思われま。しかし、その後については、維持修繕を更に行って多少の延命化はできても、いずれ再建することを視野に入れて準備しておかなくてはなりません。また、震災によって天守台から崩壊する可能性なども否定できない中、複数のシナリオを考えておく必要があります。

私は以前より、天守を再建する場合は木造で行うべきであり、現存する資料に基づいて可能な限り往時の姿を復原すること、その際には地元の木材を用い、伝統木造工法で建てるのが基本であると考えています。再建天守の再整備にまつわる文化庁の姿勢にはやや軟化の傾向がみられるものの、依然として慎重姿勢であることに大きな変わりはありませんが、そんなことを言っているのは日本から天守閣は次々と姿を消していくことになるので、いずれ厳密な往時の復原でなくとも再建は可能になると見込んでいます。

もちろん、だからといって簡単な事業ではもちろんなく、長い時間をかけて準備し、木材・人材、そして財源を貯えねばなりません。万が一、災害による倒壊など不測の事態が起きたとすれば、すぐに再建というわけには行かず、ある程度の長期間、天守が無いという事態も受け入れねばならないと思っています。大事なことは、構想を温め、少しずつ財・材を貯え、技術の継承を怠らずに、その時に備えていくことです。したがって、木造天守の再建は長期的なテーマとして、息の長い意見交換と準備作業を継続していくべきと考えています。今回私が発表したマニフェスト「新しい小田原へ～第4ステージの取り組み指針」にも、「天守閣木造化の可能性について検討を継続」と明確に言及しているところです。

ちなみに、史跡整備を進める全国自治体が加盟する「全国史跡整備市町村協議会」において、小田原市は長年にわたり理事市を務めるほか、熊本地震によって問題意識が高まっている天守石垣の再建に関する自治体有志の会において事務局的な役割を担うこととなっており、天守の木造再建に向けても文化庁との協議を進めやすい立場にあることを付言しておきます。

## 質問 2

歴史あるまちの大きな課題は、残存する歴史的風致や史跡と、今を生きる人たちの暮らしや経済の空間とを、しっかりと調和させることにより、それぞれの価値を高め合うことであると考えます。実際、小田原においては、史跡小田原城跡を中心として形成された町割り、そこに発展した市街地や商店街、戦災や震災を乗り越えて今も往時の姿を留める歴史的建造物や総構などの遺構、祭礼などの無形文化財、現役として受け継がれている各種の「なりわい」などが、総体としてまちの価値を高め、観光の「光」をなし、来訪地としてだけでなく居住地としての価値を高めています。

一方、現実としての人口減少、いわゆる中心市街地周辺の商業地や住宅地の空洞化や過疎化が進む中、まちとしての活力を高めていくためには、一定の居住者も必要であり、幸いなことに、都心部へのアクセスに恵まれた小田原駅周辺に住まいを構えたいというニーズには根強いものがあります。

こうした状況に鑑み、全国に先駆けて高度地区を定め景観行政に取り組んできた小田原として、天守閣の高さを越えない範囲において、なおかつ史跡至近のエリアを外す形で、一定の高さまでの建築を条件付きで認め、お城周辺の景観を損ねることなく、居住ニーズの量的な受け入れも可能となるよう、高度地区の緩和を行ったものです。

小田原城は何と言っても小田原市民の誇りであり小田原のシンボルではありますが、それ以外にも上記に挙げた数々の歴史遺産が、広く存在しています。第2期を迎える歴史的風致維持向上計画では、第1期計画をさらに補充する形で、新たに公有化した皆春荘、旧松本剛吉別邸、豊島邸なども加えると共に、今後のハード・ソフト両面からの取り組みを加筆し、なおかつそれらを広いエリアで繋いでいくことで、小田原のまちの表情の豊かさに、そして歴史あるまちとしての深みに、更にはそれらを活かした交流人口や関係人口の拡大に繋げていく考えです。

以 上